

夏山堂日載 卷二十三

大正三年六月廿中浣起筆

特別

14

1919

272



不律身福徳

大正三年 五月上 流 越 也



○此の二階のつちをちかきとて、たてへり、不律身
 と名づけ、不律身を著すのこゝ、おのれ先年、
 心うけまきの事を集め、此所、うゑの心
 あらうの外、不律身の事、いふ事あり
 ○此の層とて、いふ事、おのの神が一切を、
 うゑるを得ぬ、ちかき、いふ事、つゝ、いふ事、
 おそ、いふ事、あつめ、いふ事、
 又、坊主、いふ事、あつめ、いふ事、
 味、いふ事、あつめ、いふ事、

○左の電中の什物の目六を掲げん

床

幅 大淀三子分の方幅

風鎮 虎の鱗魚一雙

卓 倣春日八足螺細紫卓

香炉 唐物うす作古銅沈紋

鼎 蓋甚の七 茶檀蓮葉

花瓶 漆樂目八卦手

薄板 鱈板 方形 貳寸三分四方

雲版 柱掛 唐物十品

花瓶 時代竹の六角籠 七寸

この野菜類

文房器具

机 桐製名木地足八足春日式

硯 黄龍石

水滴 方式白泥 一と一

墨 墨甚 ますのおとう

硯 田形小石木硯

書鎮 猿杓代驛鈴

文具 文房道 錫縁乱し盆 墨と心

座 座立 蠟燭座曲々物

類函

類山物 蘇氏印略 序 原 行 是 函

古書 各時代各種一行 七 是 函

仿為二百三字款

雲版 全泥梵字 田形

席爪 二枚抄 古華切

小席爪 二枚抄 全部古字紙を

短冊拵 奈良良紙 螺鈿装束 倭古式

其他雜什

一 三三の腰巻 凜山簾

一 托鉢用 里ぬき木製 鐵鉢の葉子無

一 呼鈴 油漬の具を以つて拵紙を

けする 七尺の

一 坐烟香 龍入 宣徳烟 其の付香

拵紙 三三の

一 方瓶入 竹の籠 西家より 高家の仕
理を入る黒

一 山元 桐葉 大時代 造き為
後あり

一 其の湯敷 蒲の方紙布圍

一 文庫 大時代 外部カンナを
用いず 三三の木の條 雲の
後あり

一 瓶裏 蓮葉を おし 漬し 紙を

一 芳里 圓千 藤の 古瓦 而 雨吹
木を 拵

一 三三のまの 三三の 小形 拵

一 磁素肌 茶托 土管

一 磁素肌 一方手の七い盆七い板

一 檜柳子 鐵鉢形 菓子器

一 珉之方心 井四足 大つ盆 三つ盆

一 線香の筒 軒物の縁部一行

一 古銅山形 鼓

一 華形 坐帯

一 竹根 研蓋 菓子物

一 以人方子 米山方 十方 一幅

一 竹根 拂子 機毛竹根

一 時代 根立 塗 長方形 敷板

一 大時代 刻寸 四方 倭古印 一款

一 未竹 地味 打出し 両面 銅牌

一 根来 三三 元禄代 瓶掛

一 輪金 竹代 竹のぬき 田形 高 蓮のぬき

一 つく 轆轤 瓶根来 母

一 磁素肌 方形 香盒 持浦 磁素肌

一 柿色 名前の 裂衣 佛壇 几帳

一 三つあし 装茶 籠

一 竹製 自在 金具 つき 掛板 三つ

一 茶人のぬく いら 千のき 長方形 銅盤

一 斑竹 柄付 火針

一 三つあしの 備房 三つあし

一 河草 土管 茶托 土管

防の洞々の事まゝく自ら慰まらるの術なきは甚し
 敢て古きを漁り之れを以つて情とすまはあはれ
 此僅くも之れを以つて聊かの洞々を忘れんとするの
 心を今と目々淫業の如く厭ひの骨董鉢
 を以つて二品三品を又とて得て情(心)を得るに
 又配置し而して敢て樂まらばあはれ如く
 傳へる一日を送るに(心)ききう然れども准(教)漫(う)る
 賤めて満足する能はずのあはれ配置調和を
 漸くしよと一七探りて此の教の洞々も角座
 お座の者を得たるも骨董鉢の主人をんて致
 味を因めし南を以て其味をいひのを集め敢
 て惜まらざるんは徳なり故也其んを心忘るん
 とも
 十二

遊山日記

大正三年六月中浣起筆

○六月十日平山寺を以て一巻の巻頭と
 二大久保甲車里四法路に是くを考
 三外に四歌一巻をねらふ
 三四(未)まゝの四(未)に閑するに
 最長(未)の白眉(未)を依
 し(未)に(未)し(未)を(未)と(未)島
 衛(未)に(未)る(未)の(未)半(未)
 系(未)を(未)る(未)の(未)の(未)目
 前(未)の(未)の(未)の(未)極(未)大

予保に關係し北地の名にありしを且大なる
みれば思しく板本をあらしむしはは四
絶にありて公の志可く得し此の東洋に
訪し彼果ししめりるるを云えとあらしむ
を測りて云ふんことそふこの一物を極大
のゆゑにあらしむるを此をなるとをあら
るるにあらぬ本を陸軍中少佐に傳し官統
大使にあらしむるの内法を報しむるに其二
つあり他は内務省の界内に古きと云ふ二枚
を云ふ又保から取つた其の甚くは朝鮮の
ゆゑに測りて北地等の古本をとりて測り
把持し測り外るる出づるを云ふことあり

かゝるるは其の北地の名にありしを且大なる
みれば思しく板本をあらしむしはは四
絶にありて公の志可く得し此の東洋に
訪し彼果ししめりるるを云えとあらしむ
を測りて云ふんことそふこの一物を極大
のゆゑにあらぬ本を陸軍中少佐に傳し官統
大使にあらしむるの内法を報しむるに其二
つあり他は内務省の界内に古きと云ふ二枚
を云ふ又保から取つた其の甚くは朝鮮の
ゆゑに測りて北地等の古本をとりて測り
把持し測り外るる出づるを云ふことあり

起したるその或るの格好を仰と記す
 隆高府に於ては所々ありて
 こと以て日本家七一見しと記す
 此官邸は伊豆候(高し)の徳記と見ゆ
 ありしよりあるの格好仰と記す
 名所の話ありてそのと見えん心かた
 末のころより日帝回遊令の減るを以て
 新築せしむる候も此の邸のありて
 七瀬屋の格好は包みたる設計と
 とう

仰の自動車玄関の着しと記す
 出向のハ仰と記す

挨拶をえんて尾しと記す
 下村の...血脚守し...
 と受けける件ありて...
 刊り終る血脚の格好...
 最す余いと記す
 閑文庫の格好...
 著る...の格好を...
 く...の格好...
 福し...の格好...
 の...の格好...
 記す...の格好...

外の感をもえん、そんを是れ心身の由のゆへに供也
十三年の事か、大要の昔あり、此の事を出し、しと
し、其の事、中め、

○六月十日の事、大蔵省、初め、維持する事、
つ、其の事、法政の報先を、し、流長、理、す、
派、大、政、指、合、る、事、の、改、定、と、行、ふ、余、の、
事、なる、こと、も、其、他、も、皆、主、命、と、決、す、其、
年、の、事、の、事、り、大、隈、内、各、り、於、ける、文、お、つ、
し、し、る、事、科、大、の、令、を、施、行、す、し、し、
あ、を、油、香、る、事、り、附、く、ん、と、す、而、し、其、由、
と、事、四、つ、事、の、令、を、事、も、觸、ん、ず、事、大、と
日、の、事、科、理、國、系、に、能、ら、る、事、り、於、て、

新、号、と、事、も、大、ま、と、認、ら、し、と、事、の、事、
民、の、輿、論、と、事、も、年、限、程、流、河、題、也
今、も、漢、印、と、事、も、私、と、事、の、特、徴、と、事、も、
の、程、年、限、也、今、も、事、印、と、事、も、
大、ま、の、例、と、事、も、の、事、と、事、も、
あ、る、事、も、維持、する、事、も、
と、事、も、私、と、事、も、大、隈、内、各、の、政、策、と、事、も、
事、も、不利、と、事、も、前、内、各、の、輿、論、と、事、も、
事、の、弱、に、事、も、私、と、事、の、事、も、
か、し、し、勿、論、輿、論、の、文、お、を、人、氣、え、り、の、
事、も、事、の、事、も、
事、も、政策、上、之、れ、と、事、も、以上、の、事、も、

之を他の二樹と丈高き楓樹ろうも千の樹を
 ちやの樹の後方二株の松樹の右手二植一
 楓樹を庭の前面生藩の二ある植くはる
 栗の樹姿勢ころし、さるるようそのあ
 らうに植く尚ほ二本の丈遙くき楓樹の
 道側二あるを後しとあしはる。さるる
 らるる前面の尺改漸く加へり七千の春樹
 一本植のらるる松の左手の何とさるる植是
 らぬ改ありしはりの大り改さる漸く可
 をさるるる判あり、髪角作庭と書しを
 作さるはてさるる神蕃とを要す氣
 二改らぬと思ふ所と終る改めさるのさる

唯比ぬり改しへきや●●方の子んを推敲
 を要行とぬめを敷せさる意作意十向し
 ありさるを清す七六之んを因しき與せぬ
 の植くはるツリヤを花壇に漸く是り
 坊ゆめりて是れもはるさる十数株の萩
 七すもこえ氣よし能母の延びさるきさ
 を直さるを標根の下枝の延びさるさる
 垂んどのさるを刈らるさるしは平井の書し
 世さるをさるに植木をさるる雨申庭を
 こまおさるしはる等ゆす、なりの世さる
 さるる絶る心氣爽れをさる
 平井の書し庭をさるる七新縁

保しコンナニ満泰甚々々施妙うた
一杯ハビコウニ~~...~~大名の舊いた
~~...~~園と~~...~~久しい
者とき思~~...~~笑一と、施子の
なり方も~~...~~長守~~...~~
片の元~~...~~何をさふ~~...~~思くハ此節
の扱~~...~~きん~~...~~前
の方とヤウト刈~~...~~後ろ~~...~~
と~~...~~前の方
~~...~~ハや前の方~~...~~
うけく初め~~...~~共情を~~...~~自
心と此の若~~...~~心ひそ~~...~~

快を感~~...~~黄穢く~~...~~
い~~...~~相違~~...~~
け~~...~~丈~~...~~丈生~~...~~
~~...~~都門~~...~~海~~...~~
の宅地~~...~~指~~...~~えん~~...~~
とも~~...~~希~~...~~ころ~~...~~
款~~...~~善念~~...~~の~~...~~
切~~...~~自分~~...~~
の~~...~~感~~...~~
キチ~~...~~一本~~...~~扱~~...~~
架~~...~~引~~...~~心

うゑ及ぶぬ。田園の草の生くるは田園の特
徴としてその飽きむ之れを飲めしむ
まぬ。先天的に園氣を味を好むは
のむ時々の後念の生くるもみづく
を取らぬを知らしめることある。可
く時尾をタクツテ踏んで煙を種を踏
て生ると街道は此處に其列花の
作を先づき二三の子女と
連ぬるま行き。此の多う煙を見て
物珍らしし。Pし、おさげのお
嬢さん。百姓をさうして生ると叫ぶ
ことある。

愛犬テスが報の本定をなして
その目もみ子を床を離れて帰る。報
地し、すみ子の前途を心ひそく悲
を親しむ。生るは自分も愛犬の報に
報の恰も此報をなして内心
いっじ手と思つた。テスと
の先妃をあらした。後念の生るに
ス。悲む。報の愛犬の報を禁
し得ぬ
二代目の犬も、千ヤと云ふ名に
生る。テスと魂の可愛らしい犬が
ある。テスと種の日と交つて生る。

弱い質であるところの地蔵の目
本犬は、肥体と云ふが、流石の盛
ん、まやまや行くを又と、
此寺に、主人の物に、
何事もなく出来た位にある、ア、ア、ア、
うらうらと困るころ、時、大、
龍めし庭の土の用を并する位
言ふは、年の形に、
よもろく、
ひある、
う樹下、
ま、
無味

の、
つ、
を、

着、
え、
こ、
景、
運、
宗、
植、
ち、

一曰いくも働かぬ都門日の去る勢は
ゆるゆる世も懶惰さるるに及ぶ。田舎
の住む世も流石に質朴の風はあ
る。此の流石の風も進まると都門化す
まはあつた。たせと云ふらんて多く
あつた。金と云ふのこの利巧と稱く
あつた。世れと褒めらん此の風潮は
同好の心も七種も行く傾向にある。こ
そ人の心も感ある。此の風潮はあ
る。長く続く心しと云ふ思ひます。遺
つた。心つた時と云ふ。あつた。ぬと
まおらるる。

てあつた。えと云ふ。都門の風潮と云ふ。金と云ふ。油和
ちぬ。此の風の世も流石に質朴の風はあ
る。此の流石の風も進まると都門化す
まはあつた。たせと云ふらんて多く
あつた。金と云ふのこの利巧と稱く
あつた。世れと褒めらん此の風潮は
同好の心も七種も行く傾向にある。こ
そ人の心も感ある。此の風潮はあ
る。長く続く心しと云ふ思ひます。遺
つた。心つた時と云ふ。あつた。ぬと
まおらるる。



電 (店) 報

受 信 人 銘 仙 織 元 問 屋

ヨモノ
オトクイサマ

發 信 人
カシヤウ
ヒラモトトケウ
チヨクバイシヨ

支 店 場 所
支店 3143
電話 3143

ジマンノ柄
トツピ安直段
見切品澤山
正札附陳列

●注意 キット オハイリ オタメシ クダサレ



代金を戻して其に将ふもの返簡を爲す
 喰つたことある者書道の監修を答へ見る
 所ある意見は後一紙をも此等印つて雨も味ある
 保し其力の勝負と其剣の鋒あること聊この故
 の異なる所ありと伺へぬるを尋ね買方
 ○商家も此れを以て引れを賣るは注意をか
 るる扱入るるは其れを以て引れを賣るは注意をか
 又こんどその入るるは其れを以て引れを賣るは注意をか
 引れを以て引れを賣るは注意をか
 やつてあるものと新しく引れと引つても常
 おろしとあるものと引れと引つても常
 此の案の思ひ子と引れと引つても常

心と身とを草木の如くのみ他人の慧眼を得る
所と云ふは、身の人に向つて身と云ふは、思ふに
と云ふは、一木一草を味つてと云ふは、
まじりて無礙なるの道なり

○御指筆法がきく在り西ある宗秩父の
寺のつとて、印と云ふは、四生に、欲ちぬめ
るもの、ま物と云ふは、おまると、物ちと、候ふ
て、且つ、おま印の、おまを、山、刻、ひ、ま、も、
り、つ、結、と、而、も、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
を、思、つ、は、ら、う、う、一、報、又、は、集、め、の、心、き、
つ、も、ま、い、さん、の、一、指、の、印、候、ひ、ま、あ、る、こ、
う、候、ひ、お、ま、中、の、一、指、を、一、つ、く、し、れ

○物名代字は、大智、が、論、百、卷、大、撮、
七、行、半、徹、意、の、花、冬、古、在、各、の、印、あり、
先、に、在、り、の、川、茶、の、造、者、を、其、印、の、お、拂、
お、ら、う、山、と、云、ふ、を、辨、ひ、書、す、架、中、の、珠、と、
云、ふ、一、重、き、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
紀念、同、古、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
古、結、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
ら、す、ん、の、某、提、の、心、ん、を、献、す、る、と、候、ま、
の、心、を、お、ま、の、目、の、同、古、結、う、と、而、して、
ま、う、る、古、字、を、無、けん、の、ま、方、く、刻、す、る、
ま、う、る、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、

○

內閣文庫公開ニ關スル建議 (草案)

我內閣記録課ニヨリテ保管セラル、內閣文庫ハ六十餘萬冊ヲ藏ル概然ナル大図書館ニシテ其容量ニ於テ我國唯一ナルミナズ實ニ東洋無雙ノ稱ヲ云ハキモノナリ 然モ該文庫ハ足利學校金澤文庫等ノ系統ヲ引ケル舊幕紅葉山文庫並ニ昌平學校文庫

等ノ大集書ヲ繼承シテ和漢古今ノ圖書ヲ網羅シ中
ニ貴重稀覯ニ屬スル典籍亦尠シトセス又題名ハ一
般流布本ノ負フ所ト同シキモ其内容ニ至リテハ之ト出處
シ異ニシ學問研究上重要ナル資料トナルヘキモノ多シ殊
ニ漢籍類中ニハ支那ニ在リテ禁燬ノ厄ニ遭ヒシ為ニ
夙ク彼ニ逸ニシテ僅ニ我ニ傳ハルモノ或ハ彼ニ後刊

參考

本アレドモソハ改削シ經テ真相ヲ謀ルモノナルニ我ニ其
原撰ノマシ傳フルモノ等アリ 此等ハ我國ニ於ケル他
圖書館ニ絶無ニシテ特リ内閣文庫ノ誇トスヘキモノ
ナリ 然ルニ該文庫ハ行政官廳ノ一隅ニ埋没セラレ稀
ニ諸官衙及官學ノ使用ニ供セラルノニニテ一般學者
ノ接觸ニ遠カリ鉅萬ノ良書佳本擧テ死藏ノ厄ヲ

其家リツアルノ状態ナルハ太ク遺憾ト謂ハザルヲ得ズ一方
ニ於テハ政府既ニ大小ノ図書館ヲ興シテ此物ノ教育
上効果ヲ認メナカラ他方ニ於テハ内閣文庫ノ如キ學問
研究家ニ至大ノ利益ヲ與フヘキモノヲ閑却シ民衆ヲモ
テ往々其存在ヲダニ知ラザラシメントスルカ如キハ^豈聖代
ノ一大闕典ナラズヤ 冀ハクハ此有用ナル文庫ニ多サ

ノ組織変更ヲ施シ斯業ニ熟達セル人ヲ擧ケテ全般
ノ管理ニ任シ其活図書館タルノ地成ルノ後之ヲ公開
シ在朝在野ヲ論セズ篤志ノ學者研究家ヲシテ洽ク
其恩澤ニ沾被セシメラレシコトヲ 抑図書館カ單ニ
圖書ヲ貯藏スル所ト思惟セラレシハ往昔ノ事ニ屬ス今
ヤ図書館ハ其收貯ヲ最モ有利有效ニ運用活動セ

シメザルヘカラズ 但該文庫ハ既ニ述ヘタルセク幾多ノ稀
靚書ヲ藏スルニ於テ一般圖書館ト其邊シ異ニスレ
ハ管理ノ上ニ於テモ自ラ後者ト徑庭無キ能ハザルハ言
シ須キズ 縱令之ヲ公開ストモ登覽者ノ資格ヲ檢
査シテ其出入シ^漫ニセズ以テ濫使悪用ノ弊ヲ避ケ
ント圖ルハ亦該文庫ヲ保護スル所以ノ道ナルニシ

公開ト云フ語ハ動モスレハ濫使ノ義ヲ伴フカク視
ラル、モ是レ該語ノ正解ニハ非ザルナリ

尚内閣文庫ヲ公開ストモ其現在ノ所屬地ハ極メテ
適當ナラズ宜シク移シテ文部省所管トシ帝國國
書館ト併ニシテ寧^コ後者ヨリ高等ノ位地ヲ與フニシ
勿^レ若シ出來得一クハ未タ真個國立圖書館ノ實質ヲ

具備セザル現在ノ帝國圖書館ノ規模ヲ擴メテ之内
閣文庫ヲ合併シ此クノ如クシテ新基礎ノ上ニ置カレタ
ル一大文庫ヲシテ英國ノ不列顛博物館文庫又ハ
米國ノ議院圖書館ノ如ク國立圖書館ノ真資格ヲ
備ヘシムルコト最モ妙ナルニシ此等先進諸國ノ國立

圖書館ハ有用ナル新刊圖書ヲ網羅スルニ努ムルト同
時ニ古書稀本其他貴重典籍ノ保存ニ注意ヒルハ
今更ニ緊要シ要セザル所而シテ此ノ如ク大圖書館ハ
實ニ内閣文庫ノ如キ權威アリ價値アル圖書ノ集
合其基本ヲナサザルヘカラズ 蓋シ内閣文庫ハ内容豊
裕ニシテ既ニ國立圖書館タルノ資ヲ具フレドモ其利用

ノ法ハ殆ト講セラレド帝國圖書館ハ現ニ利用ノ法ニ關
ケル所無キドモ内容頗ル貧弱ニシテ国立圖書館タル
ニ適ハズ此兩文庫並立シナカラ而モ孰レモ我讀書
界ノ希望ニ副ハガルコト甚ク憾々ニトス

聞ク内閣文庫ノ藏貯中ニ維新以降各官廳收容

セル
ルルハ圖書若干アリト按スルニ此等ノ書冊ハ余輩

ノ所謂内閣文庫ノ價值シ左如スル所以ノモノニ非ズ
若シ諸官廳所属ノ新本類シ一堂ニ蒐集保管スル
シ便トセハ此等ノ書籍ニ限リテ舊制ニ脩ハシムルモ
可一即チ該文庫ハ新ナル規模ノ下ニ其命脈ヲ
維持スルヲ妨ケザルナリ

内閣文庫公開ノ必要及其方法ニツキテ弁見シ述フ

ルコト此ノ如シ是レ少教好事ノ希望ニ非ズ實ニ國
内幾百萬讀書者ノ一齊ニ唱道スル所ナリ願ハクハ
當局本議シ採納アリテ速ニ之カ實行ヲ圖リ以テ
大正奎運ノ新興シ期セラレシコトヲ物筆ヲ筆堪
井

右及建議候也

内閣文庫年刊放ノ開キ建湖ク先口
頭ニ大隈信記ノ海述を託せんと言者
と云ふ提出と愛するまゝと云ふ和由希
大岡者彼者身ノ痛ん心る言の者
乃右の如し目下島人交渉中也
(大正三年七月日記)

○大隈内閣が時、解散を動し、聞らき以
て臨時議會も定まらぬ事もさう、閉会を告
げ、その縁の事をも多し、於て多教、大隈の
さう、言動も偶に自家の無氣力
を表白し却つて内閣をさうと名を為さし

めりう伯大隈音ねと始め各大臣の決心あるは
るを既述法内各に格をきりて見さうし三派
のいふこそ所謂ナンテモ事いひの意を氣を
示し大臣と然る間と思ふは痛一けりが非
由困り寧ろ昔例の如く然るを大臣も其
間を促すとす少逆授をきり口をん長め
法大臣委らるるは法の目物りて大臣高を
或んとかうアキ日前也大隈伯を擁するに
不慣るんも伯の長所をきき見地其
事し概然伯の大方るる是れ并とありて
敵もこれより洲にせんと攻め入り困し
たり他の法大臣も多しと法内も然る者

とるなりしは各井巧の確るる陳多致
重に相し内各と一あり高きことをあり
の正に格を法内も大方るる法内も然る者
なりし

臨時戦局開會を生けりは内各の如く
法内も然る遊所を要する事ありて法内も
りりし物あり任田人といひ防務人等
奏減税といふ事ありて此等事あり未
も案にありは内各防務人等物あり格
あり困窮あり格あり法内も然る者
減税を格あり法内の及相と云ふなり未
内定七月の初め事ありありあり格

ありの及おれんや **札** **北** 結るる也
 こせん要するも **困窮** **大流** **北**
 後より内閣を援助する **同** **終局**
 しては **支** 唯一 **内閣**
 内閣の **困窮**
 皆ま **大流** **内閣**
 ありと **内閣** **成**
 の **大流** **内閣**
 き **大流** **内閣**
 例 **大流** **内閣**
 り **大流** **内閣**
 一 **大流** **内閣**

一 我 **大流** **内閣**
 也 **大流** **内閣**
 結 **大流** **内閣**
 一 **大流** **内閣**
 一 **大流** **内閣**
 一 **大流** **内閣**
 一 **大流** **内閣**
 一 **大流** **内閣**
 一 **大流** **内閣**
 一 **大流** **内閣**
 一 **大流** **内閣**
 一 **大流** **内閣**
 一 **大流** **内閣**
 一 **大流** **内閣**
 一 **大流** **内閣**
 一 **大流** **内閣**

(大正三年七月三日記)

○七月廿日 大流内閣を **大流** **内閣**

邦武生るまう古簡一象と云々
又中川滋印と云々
去るや多帯末の状況七たつらんと其味
をいふ久米と倫と見やんと云々
の古簡を復く其の云々余を指物
而も亦米と久米の珠をいふ
りす備と云々
と云々の言しと得る
と云々の言

彦根藩の中川録り彦根藩先守
對馬に送了し手取

彦根藩先守の中川

等米は向中川上は風流如何承なま
地梅花之假お成り好風日を待居
茶の傍大成の花園を開き桃李梅
を種る待客中川書
日隅川上野市野山日暮向夫々吟節
居り去年より津藩高友徳我出府
之申川と云く海防藩功々大名の別
杯常々

三
上漏大砲之雅遊杯。稀成子と存不旧冬水戸
老侯不叶也。登堂望海。岸ハ不似打拂。此答と遊
美ずし。夫み付一秘子。見と不肥。亦領島邸。此
諸侯。宴會有之。画工六。三川院侍。庄ハ処酒酣
比肥。前侯之。三川院に命し。枯たる松ヲ一本かき
吳小探政申ル。自書終リ。小ハ其下ニ水流ッ。お
添ル。探と命ハ其首一。水流ッ。アシラヒ申候。肥
前侯大言シテ曰。松平ノ松モカル申候。徳川の流モ
源なく。お成ハカクノ時。吾口ナサテ。松ニコエヲナシ。水ニ
流レテ添シ。我とと大云。中ニ星王ヲツケ。ハ多くと。画上

三
ニ星王ヲカケラレハ。二座興ヲ醒し。伊達公一人。冷笑ハ
し。し居ル。之ハ三川院ハ。席ヲ立。枅申上ル。拙者。長袖
ナニハ。は俵ニハス。マシ不申と申ル。由是驕慢ノ子。吹
憤激。之故。吹加探。諸君。徳川氏ヲ輕侮。之者。侯
公ノ中。之出来。少子と。竊ニ有。志。之者。撥眉。仕。更
ハ。治。深。秘。之。子。殊。ニ。歳。首。と。申。ス。中。俗。人。ハ。又。々。氣
ハ。無。申。ル。とも。執。中。之。度。々。石。碯。ハ。故。一。寸。桐。淺。申。ル
大笑。而。可。須。扱。火。大。塚。翁。ハ。一。寸。中。モ。ウ。シ。の。下。室
ハ。例。ノ。把。人。憂。天。ハ。弊。學。士。ハ。常。態。ニ。ル。金。ノ。市
譜。代。旗。下。シ。人。ノ。畏。人。ヲ。海。内。大。諸。君。ニ。輕。慢。シ。心

宗津水
氏別荘

生可嘆乎ニハ

濠梁園を其今更不堪懐ハ

去年紅毛人風説出て今年アメリカ人島ヲ伺

ヒルナド申上ルヨ

一百石廿五兩ハ代價ニ由前祝ヒライタシル家中モ有

之ハ

一良高杜健蒸順温有孝有時ニ風ニこと存ド

一書函會も時々有之ハともニ朱金可惜ト出席

不仕ハ時々扇子ヲモウヒ困リ罷在ハ

右出書甚中上ハ正月の島甚ニ勝ル一ニあタ

ナシン

正月三日

嘉永五年正月

漢卯初音

中川祿所ノ漢卯

五清園

侍妾下

宗津水對馬ノ号

この函ハ子使入ルのハ祝ヒと念ハ心ノ子有シ今更ふ
ありハ杖ノ其ハ極味ヲ感シハ

北村氏トり送リしハ否ヤ右ハ子使ニすリ寫シ出シス

上ハ先生ニは念ハ心ニ送リすル事ナキ

アラウトツキームに山てく換抄の漢後を
へる米原をさうし大改各社の形を記
る由敷のうすまう伯を捕し七の官伯の
政況上の所見を記す伯長にこゝして快活
後指立言七氏をさすしめし異言を
又別記年と空都く着し多敷の百代し
早くらん族然然を十村梅入る聖九
京都侍在十の朝跡にて記すいり大改に
一海十の六の法在十二の朝物在十此の教
の洞の集をさる信み漢後を記する教を
十面よりい美敷櫻くさあきを記すも七流
汗背と濡るもさるる記する記する

とさあす大漢法大雅集と持し聴ふん
舟のしえり主の神を此の傳人のうり
情集を抄する集をさるる記する
とりの記すしりる見事すいり
関のめり若歳を記すいり

紀撰小也唯九日又樹木多く故味と嘗うり
地はなすも思ふらん先帝守の大森の
の講する福人の九月十日以降一巻解あ
ハハ十葉に在りては二葉の便と伝へ
過るを解して調書よりよき約二十葉
人伝てあふく即ち巻解の採入約を
人との昇して是を文とすしと云ふ皇太后
崩御の事涼洲中よりことと云ふ之んを
しつゝの先帝の御政を巻解すとも思ふ
しとて皇族方もて之を先帝の御政と
すしとて御政の事と云ふ御政を解
すことと云ふことと解せしむる

この沿革海をあらわし、又は新巻の切
り板をこゝに貼付して葉を換へるは
巡覧の大意を著けん子二條を流るゝ香
の大工師を福し海次さんと稱し、又
りて規模をあらわす大也全編塊と
入の段所を海次さんと稱し、全編
納合

○送給中局の夫らに記念として伯と村田並に
余ら局に鑄造する小正各一箇を贈る
伯と銀版2局の連葉を鑄めたるもの
金と打金おらうち瓶と古徳信の身印係と
鑄めたる徑二〇寸三四分の山牌と贈ら
る首後早稲田の心うす銅牌のまゝとし
て君のつらさうが而も生送幣の向う共刻三
者と伯の身印係を心り伯と共に送給
の際に贈る記念物とすを向うに情
希のしる也此の牌の背面に鑄造の年
月と刻す即ち大正二年の心也场内巡遊の
此此物の陳列しあつたをえり贈るべき也

○送給中局の標上におくすも各あるをねり
一正あつたの送給幣と陳列すは各金を
の標をくるとも身印の正をくるとも判教教函を
とるの正をくるとも改く一正品をくるとも
けらう西洋の送給幣の内をくるとも白耳義兵衛に
一二張民地と流布する中央に孔ある貨
幣とをえきけらう我邦に於ては鉄を
細とるせともぬらとて他の送給幣とを
別とせんめめとすよ此等補助貨とを
穿つたをくるとも由流す
即ち此の正をくるとも刻金とすのくるとも引金
とあるをくるとも又金の七割とすよ此の

陳列場の一角に順會社後援家の高木
こうじろ刀剣附属品の鑄型並り
陳列し其鑄造部は小ツカカ
カシラセあり而して小ツカカの柄の鑄型
むか多きを占むるなりを留め奉仕する
後援家の末裔あり其人の名を
とまふ此鑄形の中心は高木家の名匠
の遺型也念ふにわろくわろく致味あり
この也困るるも惟れども是れ初めは
を鑄造の体念て型を鑄削し
ゆ夏確りし此の夏確りぬる一乗の
の人也此の法にたきここも

の大鼓も習ふ向進也や一國
二人に命をす一も甲賀の
山形備とせしと備と稱し
と異なり甲賀も一年は
隠す、
この
い斗ますの
感し
内後
田大
る、
甲賀

○七月十日 多岐の一行 物事の余と云ふ余
又一行と云ふ大岐と云ふ但比余と下村大丸整
理の状況を見るを一面の力を及ぼさんとの伯
の列を外れを京都と下車す保く互人なり
為次り伯と見えたり 寺京都に轉り乃ちお
折るくを先か由在湖南と云ふ由お外京
都長中大夫の因人の油印を求めたり内閣
文庫開放に關する中蔵の消息を知ら
ぬる也 寺に油印既に満ちて中蔵又入手
す内閣中内大臣文庫の開放を期すこと
同一物事と云ふ余院より中蔵の寛大の
出入りを見るを現むる友まゝ三行在る

すん中の中村の族と云ふも其家族を引
おしとお氣をぬりし 寺に在るをさしおのち
別居の趣心を 解完家と云ふも入つて己
の能くお解く大徳院に移しおし
寛大の法に改めしる 寺に在るをさし
おのちの趣心を 寺に在るをさし
り神觀の趣心を 寺に在るをさし
と云ふ余の戒を 寺に在るをさし
湖南と云ふの因吉荒干と云ふ中
と云ふ余の戒を 寺に在るをさし

南宋本 史記全集

紀典の年號刻しあり

傳來 元々寺家齋房

も電谷有軒の秘蔵せし所

春秋左氏傳

ま田望 書入本

皇暇の年序本 意くん

道皇とのお世甚に稀なり

北本 殊と云ふまは

穴振玉のる所は漢の竹簡に似し

夫はしるの三冊 四巻あり

流砂家蔵

まふがりのテロシ、ミニセアム所記の竹簡

を、此に似と一と云ふ所を下しなるもの羅の

精力と云ふは、此の言物を云ふ、この言

え、この言物を云ふ、この言物を云ふ、

この言物を云ふ、この言物を云ふ、

日十二の偶、一木文おとつた、この言物を云ふ、

この言物を云ふ、この言物を云ふ、

し、此の言物を云ふ、この言物を云ふ、

と云ふ、この言物を云ふ、この言物を云ふ、

坊、この言物を云ふ、この言物を云ふ、

北の下村家、この言物を云ふ、この言物を云ふ、

五十の言物を集めたる大書物を記す

田梅村の器字あり、山陽の器字同業中
ありしと名も北守又三葉とていひき
ありし終る器字あり

○十三十四あり下村家惣心記内儀の為儀を
先世上代業より下村より外下打家へ二三
と鳥丸下村本邸へ會て北邸へとて
てく下打母より及葉の家の家を去つて
他へ引移り（なり）唯と一二箇字そのあ
りしとていひきとていひきとていひき
とていひきとていひきとていひき
へこの調分もおありとていひきとていひき
えりし時とていひきとていひきとていひき

主なりといひき部屋くを世に流し、
と張る細細しと張れなりといひき
をえしとていひき

下村家大丸黒服衣七段尻後ひき上代
業よりとていひきとていひきとていひき
記に記ありしとていひきとていひき
七種あり也 下村の儀（なり）とていひき
三十一葉ありとていひきとていひき
とていひき也 大改京都 双方に儀あり
より儀あり 上代の高知の儀あり
常節の本を撮りて大改節の二

不をありし債権ありて却して十ヶ年経て債
印を納しし之を專断を繼續せんとして之を
を提出ししるる事大方改を代表する債権
者其意ありて改を以て同意をせしむるも
京都側の債権者も之を譲せざるべしと爲
りたるべくしり而創を生じしるる京都側
の者たるも此ゆを以てしるる京都の之を
閉鎖し未來に於て之を以てしるる事
法向京都側の債権者も其意ありて自衛
に當つて大方側と論議終る事
撤すべし然るる事京都を繼續法としてし
るる事とこを以て改めしるる事

を以てしるる事但し其債権者も其
高利貸者も其例として其意ありて
つる事と之を以てしるる事
いかにある事其の意ありてし
ある債権者も其の意ありてし
しるる事としてしるる事
も其意ありてしるる事
十た力をも其意ありてしるる事
これを以てしるる事
村井其意ありてしるる事
衛に於て其意ありてしるる事
えん其意ありてしるる事
たす其意ありてしるる事

抑々又此一家年々しく下村家
(即ち此一家) 伏見の家並に北家
即 三軒の家の三軒の住居河原に付
てり余と候り申す振入り油本を
高きえと高下おの二年の住居
五六千田伏見の家一萬四五千田世家
五六千田金井三萬六千田の世
の家大凡是服迄り申す振入りの
よの申す惣記申すを貸地代仕
おを合し一年一田葉中千田
下村と大凡のみの自家の土地を
振入りと他と借入り借地に利

子并に元を債なり割と概算す
この十萬田を下村の部と前
陣の出入四万四千田の部と
三家世の部の部論一畝の銀地
り申す申す下村にとき大
家は松を申す隠し申す然るに
いふと申すは隠し申すを
されと其定敷田の家財の旨印も
と申すし申す申す申す申す
からぬとき申す一物も申す申す
ありんか申す申す申す申す
の旨印の申す一果ある申すの旨

地を五町一丁の目利を賣り一兩を松
てり年々の買入振を免え一兩を松を
傳を借かりの上入あめのの出目をせし之
んを以つてせせの書に免の目もつて納し
道わつたのいかに言ふは難いしあるは
才也今も海にひかぬしあるは
村に納えしは馬込下村の二丁の最
計を三千五斗の田伏見と二千五斗の田北
家と千五斗の田金井七千五斗の田を以つ
て回復しとせだて立行く振の即金
をかちしとせあめなる三万五斗の
し生れを五分の二に減らすとせあるは

るんもこの坊を賣るは目利とあるは
の徳もさう

因に下お家の不動産を以つて
行ふものありと部提供し是干の債務
をりい其をせらるるに支給し債務を
下村家并債の責を負う。今下お家の
を賣るは目利とあるは

日七月十五日 河女たちの徳勝を振うんと毒攻三河
平の毒と伝ふ。昔は故と河女今今の間の縁も
を圓んとと内毒同も今縁の佳しと色
河平毒中大石止と時田こら一昔南海人皆
ま出あふ方振うとて 毒同志とらふ大石
とら余うう行るなをうし 際大の國政の好
書と抱き 後毒をけつる 形はとある余
と三日百二番旅事と二万百留事とてしは
このころに河女ととらふ初めと也 四人と
志ひこけ在や一と飲神とをいふ 河女今
抱へてもを抱るもいと佳しとめとて
大石の河女と伝ふ内毒ととらふ一

とてあふとと概を結抱一に尾張ととめ
いふと持完し 概を各を尾張ととらふ
とて尾張のけいとととらふとては
神威をいふと武直と自ら大浦と
児と結あしと人の人を登あす
す木張の毒ととらふ所と伝神威
事ととらふと大隈任女のと衆の我を
結ととらふととらふと伝つらみ大隈内閣
とらふと所と外毒ととらふと
江ととらふと余毒の所見と一及び酒後全
ととらふと今の子の毒方面ととらふ人抱
ととらふととらふととらふと

又此の事ありのやうと朱に其方(と)を云ふに四徳の
の授助を乞ふに其の事を見ざる所四徳の
の才と力とを乞ふに其の事を見ざる所四徳の
節の事大なるに其の事を見ざる所四徳の
事をも乞ふに其の事を見ざる所四徳の
中此の事ありのやうと朱に其方(と)を云ふに四徳の
事をも乞ふに其の事を見ざる所四徳の
志ありの校及の後授令の事を見ざる所四徳の
その事ありの校及の後授令の事を見ざる所四徳の
と七根きく事あり

〇金も書も改む
 つ感しるるを美術
 心論能た、善い
 しをせしむるは是
 ん此の能中檢
 出しはるるつき
 りぬきこゝるぬめ
 おく
 大正三十四七月
 廿七の

コピーに就いて

市島 春城

昨年の何時頃の事であつたか、ボストンの博物館から日本の書畫を買集める目的を以て、人を日本へ遣はしたことが有つた。其時は或名高い鑑定家を訪ふて、其人を伴うて都下の第一流の書畫屋を訪うて、屏風を買ひたいと云ふので、數十雙の屏風を出さして、其同伴者に謀ると、此も可かぬ彼も可かぬと云ふ事で十中の八九は悉く同伴者が承知しない。其處で、其買人たる米人が不審に思つて、ドウ云ふ譯で斯様に賈作が多いのであるか、全體屏風の如き大作を造るほどの畫家は、餘程の手腕有るものに違ひない。又是迄の大作をするには、其勢も一ト通りでは無からう、其程の勢と技術の有るのに何故賈作などを遣るで有らう？と云ふ質問が起つて、案内した人も、殆んど答辯に窮した。併し事實を謂はなければ、外國人が納得をせないから、日本の國情を語つて、如何なる大作でも、相當の技術有るものが、勞を厭はずして賈物を造ると云ふことを語つた。其處で其外國人は、ひどく心配さうな顔色で、實は屏風の如き大作は、よもや賈作は無からうと考へて、是迄ボストン博覽會に集めたものは、日本の畫

ではおもに屏風である、其屏風の集めた数が三千雙の多きに達して居る。今御説を窺つて見ると、この三千雙の中にも必ず賈物が多く混つて居るで有らうと如此く氣が著く譯であつて、實に危険な思ひを爲しますと云ふて、ひどく氣に掛けた様子であつた。で、この話は自分がこの同伴した人に聞いた話である。是れに就いても日本の書畫界に於ける宿弊を痛切に感ずる譯は、何處の國にも名畫の賈物は無い譯ではないが、日本の如く賈作の矢鱈に多い處は、恐らく世界無比で有らう。試みに田舎廻りなどをして、宿屋や茶屋へ立入つて見ると、襖や屏風や額面や幅などは、殆んど百中の百まで皆賈物で有つて、殆んど賈物を以て四面が裝飾されて居る。孰れも落款を見るとき、皆大名の書家や畫家のものであるが、田舎廻りなどの賈作になると、殆んど原作に尠しもない位な甚だしい者が貼付けてある。是れは勿論極端な例であるが、も尠し上等のものになると、中々賈作は器用に出来て居つて、殆ど鑑定家を魅する程のものも無論山有る。で斯様に田舎の茶屋などにまで、裝飾品としては是非大名の落款のある書畫を用ふると云ふ事が、取りも直さず日本人は書畫を味ふと云ふよりは、寧ろ大名の筆者を欲すると云ふ事

百人中百まで皆賈物
 田舎廻りなど
 鑑定家を魅する程のものも無論山有る

の一般の傾向が解る。眞に書や畫を味ふと云ふ譯ならば、ドシな聞えない人の落款でも、其れが裝飾にならなければならぬ譯である。畢竟書や畫を味ふと云ふよりも、筆者を尊ぶと云ふ處から自然に賈物も出て來る譯で有つて、隨つて賈作と云ふ者が一ツの商賣になる。中々全國の家屋の裝飾品として、大名の賈作を要する分量は實に大なるもので有らう。一軒屋に一ツ二ツの額や幅、若しくは襖張りに二枚三枚の賈作が有りとしても、全國に通じては幾百萬、幾千萬の賈作が有る道理で有つて、是れから考へると、賈作營業と云ふ者は、中々大した商賣で有る。是れを根絶やししようなど、云ふ事は、思ひも寄らぬ事である。併しなから是れを醜態を演じて居るものと謂はざるを得ない。無趣味なる俗流が、斯様な弊に陥いつて居るのはドウでも可いとして、上流の社會に於ても、猶この弊風が盛んに行はれて、頻りに賈作が金屋玉堂にまで入込み、往々にして鉅萬の金を以て、この賈作が購はれ、且家寶として珍重さるゝに至ては、實に趣味界の一大醜風と謂はざるを得ぬ。斯様な風尚の行はるゝ所以は、何から來るかと言へば、一

癸一 茂木敦直 (加茂親友)
為其傳子

癸五 照元 (佐木正信傳子)

癸六 佐々木文山

癸九 堀江治部宗

癸十二 西也重月

癸十五 文山

癸廿一 輝照什
古上谷

癸廿二 寺井養拙

癸廿三 筒井左京進

癸廿七 鳥山照南

癸廿八 日上
未詳

癸廿九 光悦
未詳

癸三十一 光舞五五

癸三十二 小堀通成

癸卅五 日允

中廿四 角名与一
中廿五 皇親信房
中廿六 為田友閑
中四十 中村久哉
中五十 了佐
中五十 大橋 忠房
四十五 貞元
四十七 尊雅

大正三夏訪物書

○毎年夏の訪物書：此の通り、何れも本年も春
秋の訪物書と移り、ついでに、秋の訪物書
と改題して七月廿九日東京を起し八月七
日に物取二通りを越し、秋の旅行と改題す
た、いと満ちた、但し、此の訪物書は、
極古き、多岐なり、中、秋の訪物書、大隈侯
後援會組織、中、講演會、中、函の法、
中、先づ、中の十三、年、法、中、函、函、
骨、中、中、中、中、中、中、中、中、中、
五、中、中、中、中、中、中、中、中、中、
中、中、中、中、中、中、中、中、中、中、
中、中、中、中、中、中、中、中、中、中、

りりらうす言下り列車をる道と申す母
お隣をうらやましく上り列車を列車
海山登る内こきりる試う花あこも
りあうあう揚る言ふ其う言ふ言ふ長
己方面の十数の揚るを汝ら申す言ふ
ふ能くさくし其の海細を左のぬめを
格好のけりソのけりすのさく一けり井の
午後うさく一けりを申すぬめをさく
う十のけりさくぬめをさく言ふ何んか
あゆめを流をさくぬめをさく言ふ
ぬめをさく言ふぬめをさく言ふ
井のさくぬめをさく言ふぬめをさく言ふ

甲種特等車に泊りて海流す余の咽喉に
お隣をうらやましく上り列車を列車
海山登る内こきりる試う花あこも
りあうあう揚る言ふ其う言ふ言ふ長
己方面の十数の揚るを汝ら申す言ふ
ふ能くさくし其の海細を左のぬめを
格好のけりソのけりすのさく一けり井の
午後うさく一けりを申すぬめをさく
う十のけりさくぬめをさく言ふ何んか
あゆめを流をさくぬめをさく言ふ
ぬめをさく言ふぬめをさく言ふ
井のさくぬめをさく言ふぬめをさく言ふ

心ゆくは歌を視るを益おぼしむるを
しり三階ふしいとふし其心あらば
七もゆるるをり多き好くもよ
しと頤と解くくくくく
○夏入江木末(三印)休無中行か飯山よ
り油者石松杉萩入経ひてやしく金を格
崎よふひ来る余歎時改姓もよ及
そ若の成りてゆくもささし余の國心ま
母捨けりて送るゆゑを思ふや木末
を記すを司りてくくく木末を遣ふよの
すあをさあく一石をさうくくく木末
まあをさあくくく

◎早稻田三階ぶし

○早稻田大學三名士こーこーでー

芽出度迎ふる我等の喜び如何ばかり

○早稻田くこ戀にするわーせーだー

早稻田 咲く花何程見事で戀にする

○見よや彼方の常盤木のもーりーはー

世にも勝れし心の古里我が母校

○學の獨立進取の氣こーれーをー

我等の理想と定めし早稻田の尊厳とよ

○山の端近く月出でくわーせーだー

葉末に宿れる白露亂れて飛ぶ螢

◎早稻田いたこぶし

○早稻田田圃に蛙が鳴くく

江戸川ほとりに螢飛ぶ

○我等故郷の早稻田の園に

咲けや咲かせう國の華

○夏は江戸川螢の名所

冬は面影橋の雪

○野暴な様でも早稻田の書生さん

どうやら妾の虫が好く

家自今初書

群山於海烟

高人千里外

野堦一有室

無自忘江海

情於醉後全

留節美三日

佳話亦成篇

古城を在る寺自京

後漢代生新嘉通啓

予二日母を以化也

以色正海村

本生林

○物由に於ける枝用既に終り四巾鏡鏡平
泥淑印ハ山及び龍皆去り而る余以とを格
停と止まると言ふ善し石家歯科匠に
竊歯を沈見と改り也余少壯齧歯を
患ふ之れ、為め一竹止歯科匠を煩ふこと
年々或回、近年齧歯を患くさるる各
歯漸くゆるむ、飲食に不便を感ず、石家
歯科匠余を齧歯あり、前日早業と尋る、余
の歯を捨ると云ふ此處に、故抑もは、
害の全歯に及ん、先生に、余、割車業に
於て之れを理すること恐く、不可、格、
に於て、若し、ある、僕、日の、為る、位、を、は、

全次敵を難くする事と余其より往ひ
ぬる格好は既に述べたる如く、石塔果しん
長云々、機械を格好に出所して、縛りし事、こ
余の格好に利するもの、聖報とて沈黙あり、左
か、一行するの、後を、終り、石塔、出所、七、左
つて一日六七時間、沈黙、事、委す、石塔
渡食を、忘れ、す、終い、終り、右側、上下、敵
数、崖を、沈し、且つ、全冠、金橋、を、以つ、て、補ふ
こ、ろ、格好、を、右側、上下、敵、漸く、飯、食、と、障
礙、を、さ、ら、せ、し、母、口、中、初、め、と、夾、扶、を、さ、さ、ふ
而、も、こ、ん、一、歩、の、沈、黙、終、り、の、よ、右、側、の、上
下、敵、各、崖、七、加、ぼ、を、要、し、中央、上下、の、崖、七

二終、終、現、を、行、さ、る、の、こ、ろ、こ、ん、余、の、格
好、の、さ、し、に、着、し、石、塔、の、沈、黙、の、事、も、た
言、ふ、口、中、の、大、事、す、一、歩、の、成、る、を、以、つ、て、一
歩、を、倦、り、こ、ゆ、ハ、セ、は、格、好、は、格、好、を、さ、さ、し、て
お、つ、る、事、の、さ、し、に、着、し、騎、馬、の、勢、力、全、即
を、沈、黙、の、事、を、決、し、い、つ、も、先、方、十三、回、忌
辰、沈、黙、の、事、も、格、好、に、三、方、以上、留、り、し、能
く、し、格、好、の、左、側、を、も、つ、る、に、格、好、を、沈、黙、を、
さ、さ、す、と、し、こ、ん、中、止、し、七、四、五、の、新、島
新、島、の、事、も、こ、ん、も、ま、る、海、食、も、ち、る、石、塔、の、方
と、格、好、し、こ、の、さ、し、に、着、し、沈、黙、を、委、し、先、つ
中央、上下、の、三、崖、突、起、せ、る、こ、ろ、を、格、好、断、し

七接し、陶歯を以てし、^又下頰之れを及ぼすの三葉
 金冠を以てし加し、左側小臼歯一を抜き之ん
 金冠を架した花の歯、金冠を架し上頰も又加
 二し、茲に漸やく全部の改善をとりりたり
 頗る多し、全歯漸く衰るゝ或は歯根、膿腫
 を生じ、或は歯肉に腫れをせし、飲食の味不
 快を感ずる年、或は近年、業肉の積り、歯を
 ころめんと、歯肉の力を弱し、殆へは歯肉は
 めり、或は少の歯肉と感ず、早つて往年大
 患の後、左頰、眼下に、神経麻痺を生じ
 え、六月、月を違へて、漸く治り、其を
 考へ、西用の、に、治くとも、嘗て、懐く、満足

するの、美を、得る、然る、而して、石、歯の、その、
 二、聴け、は、令、く、左、頰、歯、頰、の、神、経、流、石、の
 結果、左、眼、下、より、左、唇、の、上、に、連、絡、する、神
 経、を、刺、激、し、終、る、麻、痺、を、生、ず、る、の、
 理、を、考、へ、と、之、を、其、の、言、ふ、所、に、現、あ
 り、而、して、神、経、の、流、石、に、除、却、し、り、
 たり、を、以、り、し、神、経、の、麻、痺、も、此、に、回、復
 する、可、き、也、^又、十、数、年、後、を、り、し、る、疾
 患、直、ち、治、り、得、る、も、亦、く、神、経
 刺、激、の、原因、と、る、も、亦、く、神、経、の、流、石、
 二、流、し、終、る、も、亦、く、效、驗、を、顯、而、神
 経、不、現、し、る、也、^又、一、齒、は、電、氣、氣

七 顔面を加へては右眼を左眼より
くわく 顔面神経の結果として右眼より
文平にせしむるは右眼のすくすく
へは面部を多くと全部疾患の冒す所
とすう 完治するにせしむるは
此行何んのききも先づ疾患の本源を治す
ことを得ざる 治療一週間に渉りたるは
完治一週間にせしむるは 得ざるの治癒
こちしきも著るは 患るるにせしむるは
を優るに治療に要すべしとすくすく
械の後係る完治せしむるは 十数年以前
るしきも 確るるにせしむるは 治療を

要すべしとすくすく 近業歯科の機械需
の力を藉りて一層精細の域に進み歯科
こちしきも 難るるにせしむるは 歯中の神経
を取らるることきき 今も此の苦者も
備へる歯痛に注射するは 神経麻痺
しと感するも 患るるにせしむるは
し之れを治ることめらるる 微痛も
さくすく 且つ注射するは 近年も
歯士のめらるる 係る一程の業前を混入
の結果一滴の血さくすく 出さるる 手術を
さくすく 歯科 手術の進歩を執
心して 研るる 研るる 研るる

を痛切に感ずしき事此の故に成る様
概あり而して世に送るる利の心を一切を
て存し志を以つてそんを懐み一由の問す
べし此のの患を謝しむる力を余一
人に集注す其力の大きき又加工の
め費しき事書を傳ふ恐らく五十四
を下りたることありん其の加工の料とを
合するに二万円の報いし値を以て而
七返と報を得て、為め成しとす
りし事ありん其原志真に謝する事
能くあり余は終る何を以つて之れを
酬ふるもきや今とす

● 二 居す

○ 郷友坂に五十年北城流流の著あり蓋し三十年
苦心の作余嘗つて五十年其出版を約す三巻
倉と病臥の日金稿を借りて讀み興味
を感し且つ此の著の近代の名著なり
● 感し五十年は浮つて回す如氏の名著も事
郷曲に偏するを以つて恐らく上梓すと云ふも
頒布し度況の深る能はざる余君の共
心の人は知らん名著を以て 郷曲に
らんらんことを恐る余は人となりし
も君の為めは平れを君の言を平の新紙
を藉り居る天下に知らんと五十年之れを

可なり其知しを得ざるを甚に以て其一事一節編
纂の力に而して本年の末漸次く全部の稿
を脱せんことを今夏偶々郷里に歸りて新稿
とて思ふべくして東京に在りて日少筆削
五卷の著に爲し自ら著を執るに難
也若くは新稿に清花新少社の人を役し
て授筆録をせしめんことを決し
新潟に清花に特に託し之を成り五卷を以
て山田穀城に筆録を托す當初思ふく
本日暫く思腹行を乞ふ或は材料又
關く所ある此日五卷の一回せん亦三日口
授筆記せしめん前後三日を費せば此

の著とせる揮 するは母著し元分るんと
然るに山田牙次彦未だ了らぬ某日在京に
ゆへに三日の間新稿に清花を許したる
ハ了らば三日の間の腹行を乞ふ翌日口授
筆録を乞ふんとす急ぐ筆末を盡し
て八月一日天皇の御家を訪ひて年の新稿
ト本旅館に入ると日めにあを謝し七條
上へお移す腹行を乞ふこと半の腹行略
の成る偶々五卷の筆削一二材料に就て問
ふ所あり物より口授の筋書乞ふんと
撥り而して同人に托し乞ふて深更迄
を終る其名のめぐるるる朝お早起

前書と心も山田毅城の別をも待つたの影
別も直らう口授と初め午後二時迄一氣に
説法を繕うけ、あつていふ筆下録しある材料
「余の旅業中」と切り放ちて筆下方を者
きぬ先して辛あつていふ河と筆下記を脱了
するを得らう此の筆下記を脱了するは三十日
目河連載し得へき規模のもの、時間よ
路続るべき為め、筆下毎曲と悉し得らう
しと甚だ遺憾也但し、~~筆下~~筆下記行成ら
ハ筆下送らうと補ひ且つ五卷の脱し
代しと元授する所らうべき也
説法の大要如左

才一 著者に就て先づ云ふ

著者も稀んき天才の人也而も
政治に實りまゝとある方面の經歷を以
て世に示すこと 此程の著者、
拙めし捨るの人を得たること 著者
の擧ぐ世に示すこと 自家の心と撰
性、供し、~~此~~此の文に示すもの心と撰
り、古く著者と傳ふ

才二 三十年の苦心

著者の本書編著に及ぶ苦心
は、~~此~~此の著者に及ぶ苦心と題して連
載し、~~此~~此の著者に及ぶ苦心の初行

ろうこと著者の大憤大成を急
 くあらわし勅成を先人の喪に服
 して感懐をこころに起因する事
 前後三十年間を傳う侍を
 求めた事も過り文章を鍊
 うる苦心をも状況と傳ふ

才三

標題に就て

個人論語と題してゐる北城の論
 り多しなる由年 或を北城の侍
 と改題を合はざることもあつし
 刊を相乗~~り~~の二言~~集~~
 小標題の字眼をこころに併し

論とて少く支那の所謂~~る~~ 著者の
 の意味の論語をこころに併し
 考案するのをこころに併し
 ろる家の侍を相乗するを
 之と併し併しをこころに併し
 之を併し併しをこころに併し
 考と語解するをこころに併し
 味ある地帯をこころに併し
 一行の味ある家をこころに併し
 之の併し併しをこころに併し
 と兼て題標の併し併しをこころに併し
 併しを併し併し

本書の體制

本書の内容をあらわすに先づ第一編
 として先づ體制を略述す
 第一編の序文を氏名を著す出貫
 生没年月を略叙し次ぎに碑
 文墓石の通傳の存するもの
 其の文の佳揚けを先づ其人
 の一生を叙し其の著述の業
 に成る條を目録す。この序文
 といふは先づ序文を叙し其の著
 述の流傳の勢に涉る評論
 を交へ尙尙四記するものなり

入るものなり人物傳を年代に
 順をまつ但し一家名人の人物
 を出す場合は之を合傳と作り其
 七年代を著すき人の傳に併す
 ●の除外例あり(傳載は是利
 時代)も初まつ雪村支那を
 起首とする人を含む範圍を城
 田村の城田人の外に外に互
 つの城田人城田人を含むものと長
 古城田とまじり住する城田郷
 人と古元と併しあつた城田人
 といふ人物傳を以て傳載す

を元よの備をうりむ口を結成の
体と大りよ同しういふ語をか
きよの一首或は二三句のやう
數十の命を及びぬかす一
三七

才也

本書の趣味

本書の趣味の大きき境と謂
れを得しし元來其の趣味あ
り人の行為の趣味を人の
著る趣味を著る人か著る者
の趣味を以て本書を以て人の
的としたるに於てをやその

載する所の趣き多し其の趣味あ
り其著るの趣味のありき多し
を撰くも其苦心あり而して其
趣きを撰り出し得るに於て
其文章を以て其人の趣
味をつくることをいふ
此書撰入するは後述の如く其
の脚上や家のすゝをいふの
其味ありきと云ふも其趣き
又此撰入人物をいふに於て
其趣きを以て其趣きを以て
其趣きを以て其趣きを以て
其趣きを以て其趣きを以て

生かす而して體をこころる
こころる人もあるは域を
考へ外に在るものと考へ
たえり由に在るの電脚人七
元をもつて出入りする
人物多く之を二四の人と
記すことなきは記すは
人と考へ名漢して其味を
あつてし若しそん文章の
何とむりそと考へ其獨の
味を日各條に記す

わ六 著者の文章を抽出す

本書の内容を記す手紙
しと事實の興味あるこの文章
の例を扱めたるこの事實の考
究に就て著者の考へ苦心の
巧に就て語論をこころる人物
論の考へるこころる標準
として本書の中にも記す
抽出しし原文のまゝに
内容の一端を記す

わ七 北條文三郎史として

本書の味的好考する
こころる外に記す

つるに是利以尊ハ紙文氣の隆
勢盛意を一目して見得るに
論入ハ本書の如くの
紙文氣を以て其の
本書の如く其の
の体と其の
時代映に其の
所も又其の
流中流の
叙するに
紙文氣の
あること

了る所は一面の偏りを
以て一紙文氣と云ふ
父に
あり用事と云ふ文氣の人
を包むるに
其の
の傳中に
收めらるるに
この
りたるに
て洋文あり
る事

法能すのいふが其の包文の
大なる上にも又いふ之れを北城
又流のいふ七鶴といふた又

北流のいふ

中八 北城家史といふの本書

本書は一部好個の北城名流の家
史と系を得てしあつても又
ある家の一史と雖も此の書
中にあることあり而して名家多
くと又あること北城名家の歴史
と伝記といふものともよ敷記を
支るし凡そ毎家家史といふ

くして其をいふの家も何れ
かあり而して各家書者皆せしむ
家史を得てしあつても又名家の
いふことあり而して各家
に七といふ之れを五山名流とい
ふ謝物を得てしあつても又
傳記といふものなり前例に照ら
し其書者皆いふ天徳のいふ
ことあり北城の名家何れも世
今世を誰れその家史といふ
のありしつて其の位牌の

稱を得て之を有る世に傳ふる
ことを得、若るもの論此若く
既に又家に入らざるを有し、高
者の此書ありて今も其の書
樂に出づれば、其の母家
史の如く稱を得ざるもの切め、
一本二本購ひてこれを家傳に
せよ、若るものいふ七初め、徒
子ありしなり。

才九

本書の海客に伝へ得たる、副書は
著者の本書と傳ふるもの、其の
房々く、守秘、淡く、通うる、杖

料とて言ふ、影一、其の也
成者と初め、新、新、新、
のま、初、初、初、其目と、
く、ん、悲、悲、悲、大、大、大、口、
の、昔、目、を、か、か、か、
の、内、を、と、世、に、海、客、する、者、
七、の、こ、こ、こ、但、比、若、若、若、
一、七、回、者、其、味、家、の、成、謝、
を、禁、し、得、ざる、こと、の、を、比、紙、
ち、ん、の、作、家、の、集、の、多、く、
ある、見、て、ん、なる、事、也、
家の、集、の、本、と、若、も、流、

布の区感映さるり、
ハラセを例とす、
得るの困難るるを
得るも一般也、
の待技、刻本と
をぞ世の存する
と蒐集せざる中
ハ人古やると
七少くも、
こくまよと流布
区別して其の
某某の

のめ、他の
寛く、人の
三

是は活版の
勢し曲
え分、
描きし
を卸し
九行

○先考
の寺、十三
の遺骨を埋

用件多し兎耳遺骨を掘り後丸を車を
せりし柁崎に浄在の舎を合し七月三十日
柁崎を掘りしに於て新石の遺し三十一日新石
田に赴き西余らし先着の北を築き丹
吳原平とせし寺に別り形石の遺書を
言ふ沈子の遺骨を埋葬ししに浄念
寺今も合し無任の石を掘りしに浄念
前寺の一僧あるに父の家之れを再興し此
新石田の古徳寺に職を爲しし事ある時
此寺に事う式を行ひ石を漢ましあるに
カ幸に此俗の事今もありしに浄念の寺
僧関根仁と云ふ本山の林の教員ありし

此のよみおのりとの河あり僧居方と茶を喫し
一石河の浄念沈子の遺骨を合し此其方
墓の後ろに埋葬す思ふ山の墓地狭隘し
て最早す尺の餘地を存せし三兒の遺骨を
長子の墓に合葬墓石を改刻すへき歎
す一日自忘に別り此の石を合しと云ふ
期すとも

兎の古石を掘りしに浄念の
墓を掘りしに浄念の
えつ

丹吳原平余の末にわたりし一事を
浄念此山の土質と云ふ家の壁にあり

故を以つて海に為らば山の尻を土蔵に林を
て土を搬出するを許さざりしと成るを
土を換するも赤土を帯び一程の靉味
あり吾ん彼り赤土を以て玉志の目之れを
試用せんとす
高橋様を余のありの幹施して本年
春焼い入んる千三十坪位の田地の
地打の一端田山寺下の赤り佛事果て
て利り親了田内之れを繞らし灌
溉極めると地味此の赤一に推さる
地形も六可、他日改め宅地と為す時ハ
田山寺の赤丘ハ以つて庭園と充つべし

浄念寺族某細川の榮余を養ひたるこの
昨の天正新御の物余の為者、四堆り余
中車上りて強す此佛事果てすも久し
く余の家、寺裏し、今余の選居
を御里に在りし、此と及利寺の爪牙
とる余を好けしこと、或四も、今ハ森
滅恩念ありと空々
佛事終つて此を以て、形も、ゆくり
北を留めし一泊す佛、威家直、此村
次中、同宿、今七余、一泊し、深更
近流し、の別、別、
○翌朝(八月一日)兎昂車を、昔し北を、

悔くも、余いともいふ家を訪め、しこく子息の
婚儀成ると先付、其の投露に接したるを以
つて之れを祝せん力也。到りてんが主人并し子息
生に事あるをうて未だ悔へらる、事あるをい物に
寄せたる祝ひの母物を留めし倉皇に祈るに赴
はる

宗家正出の男子不孝うん多く為及嫡男
ハ物神ハ異状あり、家を継ぐ能はず、今而
婚儀をせむ及家を相傳す、若ハ無出也
配偶ハ作州津山の藤原之松平康氏之女
と云ふ宗家主人の息の妻を物もする
年あり今其決定をえり、あの日飲むる如

ついでし 余の中心祝意を表する所也

○新に侍るの日里春(景後院次女)に極立
峰と那迄茶尾に抱えを飲む酒次春余が
に雅雅と本をあるま回く余をさうす會長
村須原冬初雪深く四月にももるもあをさう
ずいふ家と遠くの日流あつたあをさうす決して
すいさう雪初め解く余のあをさうす所
以也又回く余をさうす云らんらもさうす
あを敬す常りて自ら難と提こを謝あとい
ふ可うう余をさうす不可也五峯先づ
余をさうす而して自字を得る余をさうす
常りて百あをさうす後又續るあをさうす
色傑の五峯さうすあをさうすあを難と

余をさうす恐く五峯をさうす一日の長びん
歎余沈思して終る拜あを得る五峯
自と稱し春あ又自難と得るをさうす
こが善し春あ月のあを謝するさうす
取るさうす既る拜あ拜山の難を拜あ
の難あといふ也而して未だ拜ああを
を命するさうすあをさうす余の此難と提
ふ所以也春あ手別難と古樹と云ふ古樹
春あ拜あといふか油和を得んと春あ手
首上白く酒酒の一日さうす日里氏
の家族先人徳松酒を嗜む生る前余の酒
敵さう

の影をのちるに、往還の河新保一保田、三浦、新
潟の貝あし、塩倉、寺、余を控し、き、錫条
を或る行好身に、飲ちを例とす、おぼやしく
をり、辭せも許さ、い、言をそん、ち、若、り、し
明代、子、女、同、じ、を、保、ち、を、動、し、人、を、答、を
へ、ま、う、あ、し、う、流、人、や、其、の、り、ん、を、あ、し、し、旅、館
中、の、人、と、ろ、ま、え、忍、い、う、と、あ、ま、ち、田、人、の、厚
き、日、出、る、と、や、而、も、毎、日、出、る、飲、ち、を、改
く、中、元、の、境、に、入、り、し、る、そ、ん、を、控、え、炊、し、こ、ろ
さ、し、あ、し、が、そ、ん、を、一、夕、田、人、に、先、け、し、り、し、し、
か、一、次、そ、ん、を、旅、館、に、も、あ、れ、の、あ、ま、い、値、や
よ、こ、の、御、壽、に、扱、こ、ろ、し、ら、う、も、快、也、と、旅、館

行、川、に、依、り、一、橋、を、眺、望、左、右、方、橋、に、從
つ、て、行、ち、變、態、し、左、方、に、紅、の、こ、と、を、右、橋、を
望、み、前、面、の、海、流、又、は、波、を、し、め、り、白、紙
眼、中、に、今、ま、さ、る、余、は、何、れ、を、控、え、し、り、田、人
に、聲、を、し、り、し、り、あ、れ、は、何、れ、を、控、え、し、り、あ、る
や、お、親、那、を、し、り、し、り、と、名、を、も、そ、う、ま、い、こ、ろ、し、り、
を、あ、ま、ち、ん、旅、館、に、こ、い、ま、ま、う、橋、を、つ、る、け
ん、旅、館、を、北、の、ぬ、り、み、に、親、し、め、り、酒、を
呼、び、し、り、割、酒、す、り、酒、濁、し、り、田、人、又、控、ち、り、
余、を、控、し、り、し、り、あ、れ、は、何、れ、を、控、え、し、り、余
は、と、い、ふ、の、し、り、家、を、し、り、物、事、の、口、物、に、田、人
に、物、法、を、先、け、し、り、し、り、旅、館、に、あ、ま、い、し、り、

僅くは奴と廻けたりし時呼ぶをん漸く是る
ら、そむく、新居の習俗人を困らるこ
のち子、歯牙の沈黙を言へりたりは
石塚界に度井とある他の友人を釋松亭
(若杉橋の邊)に招きし一々の言あを結う口
中宿意を次の自祝の書に表しし事あり
石塚に謝意を志すを木元翁の書
畫と高くしし事あり其の題(甲)を新居の
竹や枝書甲乙丙又皆余の書とすし
しんまてん人々又終まにせし出ます余は
解する能はず、一と恐あすとの圓の
三、愧つるも、此の事ありしこと

方と即方とを言ふ又一程念心の方也
余も子、海がこころ、一ひを釋松亭に
利の或人、此の事ありしこと、
ハ自ら、利、此の事ありしこと、
七とぬ、此の事ありしこと、
客を言、此の事ありしこと、
海を言、此の事ありしこと、
新居の、此の事ありしこと、
この先、此の事ありしこと、
而、此の事ありしこと、
也、此の事ありしこと、
る、此の事ありしこと、

乙進分一二世と記す流石に著しわづれき姑
つうちの娘のそのる所は所々ありす。序に在
りたる甲乙全ふ再終して此主の傲岸
人こそを入んて来る。記すや、おぬのころ
凡の吹き出しし。家ある先生の祐と容
ること喜ぶ。ゆめを統に去るの日お怒ると呼び
客師自由の道に備へし。うぬし余が
多く親しむ。而も主の道に聞かば三回
余の病に付し。ことあると云ふ。而して
余終る。懐記する。能くいふ。

以下全て

白紙

